対馬丸記念館と、遺族・サポーターを結ぶ、ふれあいの情報誌

対馬丸 通信

Tsushima maru press

発　行：(財) 対馬丸記念会
発行人：髙良　政勝
編　集：対馬丸記念会事務局

平成21年1月30日発行　第17号

特集 映画『銀の鈴』

―対馬丸より、今を生きる君たちへ―

昨年の対馬丸慰霊祭でも皆様にご紹介した通り、対馬丸を題材とした映画『銀の鈴』―対馬丸より、今を生きてる君たちへ―の製作が進行中です。今号では同制作委員会が立ち上げた、インターネット上の日記『銀の鈴』ブログから抜粋転載して同映画の製作趣旨や映画製作の進捗状況を特集します。（日付は記事のブログ掲載日です）

■2007年8月16日

銀の鈴　制作裏話

2000年の7月に「銀の鈴」を上演した。沖縄からの学童疎開船「対馬丸」の物語の舞台化である。なぜ対馬丸の物語に着手したのか、そのへんのことをちょっと書きたい。

「銀の鈴」のことを話すためにはもっと先の公演「蒼き道標（みちしるべ）」公演から話しをしなくてはならない。

この物語は昭和19年9月、ある若者が一人の婚約者を残して徴兵され、門司から兵員輸送船で大陸へ送られる。しかし、そのまま行方が分からなくなってしまうのである。終戦から1年ほど経ったある日、彼の乗った輸送船は門司を出航した翌日に、米潜水艦の攻撃によって沈没したという事実を、若者の兄が知るのである。戦時中であるため、船が沈没した事実は隠されていたのである。

実は、その若者の兄というのは私の父親である。小さい頃からこの話しはよく聞かされていた。父親の家にも、その弟の遺影は今でも飾られている。

ある日、次回公演の題材が決まらないまま実家へ夕食を食べに行った。期限はあと1週間しかない。のんびりしている場合ではないのにである。

そのとき、父親が電話でその弟の話しをしていた。よく聞いている話だったので聞くともなしに聞いていた。電話が終わるとすぐに「今の話しをもう一度聞かせて」と父に話す。丁度、「弔魂」という題でその話しを小さな手製の本にしてあったので、当時の写真とともにそのまま借りて帰った。

中略（この話をもとに「蒼き道標」が上演され、その年のスペース・ゼロ演劇賞をもらった）

この「蒼き道標」はその後、1998年に書き直され再演された。その時、いろいろと調べて行く中でいろんなことが分かってきた。

昭和19年9月12日、門司から上海へ向けて出航した船団があった。船は「和浦丸」「赤城山丸」「暁空丸」「江田島丸」である。翌日の13日夜半、米潜水艦の魚雷攻撃をうけ、「江田島丸」は沈没する。「暁空丸」も被雷し、ほどなく沈没する。死傷者は兵員のおよそ二分の一に相当する一〇五一人であった。その「江田島丸」に私の父親の弟が乗船していて、そのまま帰らぬ人となったのである。

その9月12日のおよそ3週間ほど前、沖縄の那覇港を出航した3隻の輸送船があった。沖縄から本土への疎開学童を乗せた船である。8月22日午後10時22分。米潜水艦の攻撃を受けた「対馬丸」は、多くの子供たちを乗せたまま海の底に沈んでしまう。その「対馬丸」の僚船であったのが、前述の「和浦丸」と「暁空丸」である。その2隻は無事に長崎に着いたのだが、その3週間後、兵員を乗せた「暁空丸」は「江田島丸」と共に海の底に沈み、その年の暮れまでに「赤城山丸」はレイテ島沖で沈没し、「和浦丸」も沈没する。

この「暁空丸」と「江田島丸」の奇妙な縁を感じて、学童疎開船「対馬丸」の物語を舞台化することにしたのである。しかし、これは非常に長い道のりを歩くことになるとはその時は思わなかった。

■2007年8月17日

今年…

「銀の鈴」の初演は2000年7月22・23日でした。ちょうど沖縄サミット開催真っ只中。

再演は2004年9月24・25日。奇しくも対馬丸沈没60周年。そしてこの年の8月、那覇に対馬丸記念館が開館しました。

別に狙ったわけではないのですが、何かの節目に「銀の鈴」は上演しております。

ということで、今年は何もないだろうと思い、「戦後62周年記念」とか銘打って「銀の鈴」を上演しようとしたら、やはり節目の年だということが分かりました。

今年は沖縄本土復帰35周年にあたり、さらに10年前の1997年12月12日。海底に沈む「対馬丸」が確認されました年でもあります。やはり何かの節目にあたってしまいました。これを縁と呼んでもよし、偶然と呼んでもよし。いちばん大事なのは、このような事実があったということです。（後略）

■2007年8月25日
クランクイン

さて、ついにクランクインしました。撮影チームは5名。8月21日の16時に那覇空港に到着後、すぐに対馬丸記念館へ。撮影機材一式抱えての対馬丸記念館到着です。若干の打ち合わせ後、翌日の慰霊祭撮影ポイントを押さえるため事務局長とともに小桜の塔へ。すでに慰霊祭用テントが張られ、いつも静かな波の上公園は何か物々しい情景に変わりつつありました。**(後略)**

■2007年8月26日
2007年慰霊祭

(前略) ここに来るのは何回目でしょうか。一人、慰霊碑に向かって手を合わせ「また来たで～」といつものように挨拶し「今日はよろしくおねがいします」と少々神妙になる。空を見上げると曇り。「うーん、やっぱり雨かな・・・」と撮影のことが心配。一番いい撮影ポイントをおさえて記念館へ向かう。記念館にはすでに事務局長や係りの人たちが来ていて忙しく働いる。パンをご馳走になり資料の整理や明日の記念館内撮影のため館内をうろうろ。手持ち無沙汰と緊張の入り混じった本番前の変な気持ち。やがてうちのスタッフがぞろぞろと現れる。全員黒服。変な集団である。撮影のための打ち合わせを行う。まだ誰も来ていない小桜の塔の撮影を済ませて慰霊祭本番にそなえる。**(中略)**

対馬丸にかかわりだして9年。慰霊祭に参加したかったんだけど今まで遠慮していた。撮影という名目だけど参加できることに自分なりの感慨がある。抜けるような青空の下、2007年度対馬丸慰霊祭が開始された。

■2007年12月30日
ロケハン

12月28～31日まで本年最後の沖縄である。目的はロケハン。南部・中部・北部。早い話が沖縄本島まるまる一周計画である。それもこれも沖縄出身のMさんがいてくれたおかげで実現できたようなものである。**(後略)**

■2008年1月4日
ロケハン（5）

(前略) 翌日、朝早くにおきて小桜の塔へ。対馬丸遭難者慰霊碑である。ホテルからわずか5分足らずのところ。沖縄へ対馬丸の生存者である上原さんを訪ね来たときに初めて訪れた。それ以来、沖縄へ来たら必ず立ち寄る場所である。毎回花を供える。昨日、ヤンバルに出かける前にMさんとIさんの三人で花を供えたので今日は帰る前に一人で挨拶である。これでほとんど四季を通じて訪れたことになる。「がんばるわな」といつものように挨拶する。いつになくすべてを見る。学童疎開者名。一般疎開者名。見たことのない人たちの名が刻まれている。でも、親しい人たちの名前である。

2007年12月31日。小桜の塔。刻まれている歌碑を今一度胸に刻む。

「わらべ唄　口ずさみつゝ　手を合わし　あゝ去りがたき　小桜の塔」

■2008年2月14日
クランクイン

今週の土曜日から撮影開始です。兵隊さんのシーンから。ところがこれ、最近の寒波で現場は雪の模様。いろいろあると思いましたが、ほんまにいろいろあります。撮影情報をお楽しみに。

■2008年2月19日
兵隊さん

滋賀県豊郷町、撮影はここから始まる。沖縄にあってはならないもの、すなわち雪である。天気予報通り、豊郷町は朝から雪が舞う。ロケ場所も雪景色である。外での行軍も撮影しようかと考えていたが、やはり建物内の撮影だけになる。**(中略)**

ファーストシーンは兵隊さんが廊下を歩く。すれ違う兵隊、お茶くみの兵隊、通信している兵隊などなど。憲兵や司令部中佐も登場した。廊下に長靴の音がこだまする。兵隊が「敬礼！　服務異常なし！」と叫ぶ。

ええカンジである。外を見ると吹雪のように雪が舞う。外の景色は撮影できなかったが、ほぼ予定通りの進行である。

ほんま、60年前の映画を撮るというのは大変なことです。

■2008年6月23日
6・23

6月23日、今日は慰霊の日です。つまり、太平洋戦争末期1945年、住民を巻き込んだ地上戦となった沖縄戦で、旧日本軍の組織的戦闘が終結した日のこと。本土ではあまりなじみが薄いかもしれませんが、沖縄本島南部の糸満市、平和祈念公園で沖縄全戦没者追悼式典が行われる。12時の時報とともに黙とうをささげる。しかし63年前、沖縄戦はすでにゲリラ戦と化し、戦闘はそのあとも続き、昭和20年9月7日にようやく沖縄における日本軍が降伏する。そして沖縄の戦後ははじまる。沖縄の作家、目取間俊は「沖縄戦後0（ゼロ）年」という。つまりまだ沖縄の戦後は始まったばかりなのだと。

さて、今日「慰霊の日」に行われる沖縄全戦没者追悼式で、詩部門（小学校の部）の最優秀賞に選ばれた嘉納英佑君（読谷小学校4年生）の作品「世界を見つめる目」が平和の詩として朗読される。嘉納君は、普段から祖父母の体験談を聞き、親の話に耳を傾けてきたそうだ。肉親の痛みや苦しみに寄り添う中で、今の平和がかけがえないものだと知ったという。

『戦争がなくなり、皆が幸せになれるように「やさしい手とあたたかい心を持っていたい」と誓う。戦争体験を「知る」ことは難しいことではない。それを「自分のこととして受け止め、考える」こと』（沖縄タイムス6・23社説より）が今の我々に求められていることだ。**(後略)**

■2008年8月27日
二〇〇八年対馬丸慰霊祭

朝早くに目が覚める。「やってもた～」と爆睡したことを後悔しながら、資料を今一度見直す。今日、はじめて「銀の鈴」が沖縄の人の目に触れるのである。おまけに本日の面々は生存者や遺族の方々。ほんまもんである。緊張していないと言えば大ウソになる。緊張の挙句、つまらないことを言って顰蹙（ひんしゅく）を買わないか心配なのである。いや大丈夫、今日は綺更ちゃんもいるので何かあった時は彼女の笑顔で切り抜けることができる。ひとまず胸をなでおろす。（ええのんか、そんなことで…）

身支度を整え、資料を小脇に抱えて記念館に行く。すでに何人もの方々が集まっている。事務室の隣の部屋に陣取り、今一度、言おうと考えていることを整理する。一体どれだけやれば気が済むんだろうというくらい何度も整理する。ぞくぞくと集まる関係者たち。

（中略）

そして2008年慰霊祭の開幕である。64年前。多くの子供たちや一般の方々が死んだということもあるが、それよりもここにこうして多くの人たちがそれを悼んで集まったということに感動する。途中で涙が頬を伝う。分からないようにハンカチでぬぐう。二度と過ちを繰り返さないために、今を生きるわれわれができることは一体何だろうか？それを模索することが重要なことだ。「忘れない」ということは、ただ単純に覚えているだけではなく、「これでいいのかと」常に問いかけることであり、「二度と繰り返さない」ということは繰り返しそうな事象に対して常に問いかけ続けることである。「銀の鈴」が彼らに一体何の役に立つのか？自身がしていることは一体何なのか？亡くなった方々の痛み、生き残った方々の痛み、今を生きている方々の痛みが本当の意味で分かっているのかと自問する。「わからない」のが唯一導き出せる答えである。「わからない」から「やっている」のであり、「わからない」から常に自身に問いかけるのである。慰霊祭終了後、対馬丸記念館へ移動。午後4時から講演の開始である。用意したDVDをセットし、PCを接続する。高良会長が紹介してくださり、綺更ちゃんも紹介してくださった。紅一点である。彼女が立っているだけで空気がなごむ。作戦成功である。続いて予告編の上映、舞台「銀の鈴」の経緯、これまでの撮影でのエピソードを面白おかしく紹介する。

（中略）

終了後、会議室に引き上げる。「さ、もう帰ろうか」というようにすべてが終わった感覚である。（中略）

改めて、対馬丸で亡くなった多くの方々のご冥福をお祈りします。

2008年8月30日
旭ヶ丘公園

朝、早くに目を覚ます。昨日（と言っても今日の夜中）部屋に帰ってから爆睡状態。早くに目が覚めたのは奇跡と言ってもいいくらいである。身支度を整え一人で旭ヶ丘公園へ（ずっと波の上公園と思っていたが、正しくは旭ヶ丘公園で、そのそばに波の上ビーチがある。ごっちゃになっていたようだ）。いつものように小桜の塔である。慰霊祭の後なので花はまだ新しいのがあるだろうと、お線香に火をつける。静かである。朝早いんだから当たり前か。しばらく来れないよと告げる。今度来るときは俳優たちと一緒だとも。慰霊祭が終わって、ここもいつもの静けさに戻ったようである。

旭ヶ丘公園にはいくつかの慰霊碑がある。今日はもう一つの慰霊碑にもお線香をささげることに。

「海鳴りの像」

第二次世界大戦中に米軍の攻撃により遭難した船舶の慰霊碑である。中央の母子像の下の説明板には以下のように書かれている。

海鳴りの像

第二次世界大戦（太平洋戦争）で沖縄県は、全国で唯一地上戦が戦われ、軍・民併せて二十万余の尊い命が犠牲になりました。戦後六十二年経った今なお、戦争で犠牲になった人々の遺骨がいまだに山野に残されたままになっています。他方沖縄県は、離島県であるが故に、海で犠牲になった県民は三四〇五人（沖縄県調査）にのぼります。学童疎開船「対馬丸」をはじめ、軍需工場に向かった若者や女子挺身隊・少年航空兵になるために乗船したもの・召集令状を受け、郷里から出征しようと本土から沖縄に向かったもの・満州開拓団から帰郷した者・南洋方面から軍命によって強制送還された者などです。沖縄県民が乗船して撃沈された戦時遭難船舶は二六隻です。海鳴りの像には、対馬丸を除く二五隻の船舶で犠牲になられた県民一九二七人（沖縄県調査）の霊を祀ってあります。二度と再び悲惨な戦争は起こしてはならないと堅く誓い、犠牲になられた御霊に心から哀悼の誠を捧げます。戦時遭難遺族会は、一九八七年六月二三日「海鳴りの像」を建立しました。

二〇〇七年六月二三日、赤城丸（四〇六人）・嘉義丸（三六八人）・開城丸（十人）・湖南丸（五七七人）・台中丸（一八六人）

など五隻の犠牲者（一五四七人）の「刻銘板」を建立しました。

戦時遭難船舶遺族会

ここにも沖縄にしかない日本の顔がある。その顔は、われわれ本土の人間には見せてはいないものだ。いや、見ようと思えばいくらでも見ることができる。問題なのは見る気があるのか、ないのかである。

■2008年9月26日
後半戦

「銀の鈴」後半戦が始まる。地方の出演者のためにチケット手配。後半戦と言ってもあと本編の三割なので大したことない。後半は特殊撮影が目白押し。空襲シーンに加え漂流シーンに荒野シーンなどなど。おまけにオヤジも登場する。そのための準備もこれまたいそがしい。でもま、ここまで来たんだから、あとはジタバタしても仕方がないので、ゆっくり練りに練ろうと考える。脚本も若干の修正が入り、役者の配置換えもおおよそ出来上がる。

大したことがあるのは年末である。とうとう沖縄ロケだ。場所は去年の年末に下見してあるので安心だが、沖縄に移動した段階であれがない、これがないというようなことにならないよう注意しなくてはならない。簡単にとりに帰れるところではないからだ。

沖縄では我々の撮影を待っている人たちがたくさんいる。期待を裏切らないようにしなくてはいけない。

とにかく映画はお金がかかる。お金がかかるため今まで多くの映画がボツになってきた。それこそ数えきれないくらいだ。おまけに一般の目にとまるのはごくわずか。（中略）お蔵入りの映画は数えきれないに違いない。おまけに大阪ローカルの一劇団がやっていることである。それこそ、ようここまできたもんだ～、というカンジである。映画作りを通じていい経験をさせてもらっている。おかげで知り合いが数倍に膨れ上がる。それも全国にである。この映画制作、最初は鳴り物入りで始まったが、次第に淘汰されていくことになる。消えていった人物は何人もいる。裏話は尽きることがない。これもどんな現場でも当り前のことである。所詮、人間の集まりなんだから。しかしこれからが本番である。危険な撮影が目白押し。撮り終えても編集もあれば音楽もある。公開までは気が抜けない。オープニングのエキストラもひそかに募集を開始した。順調にいけば12月30日に沖縄でクランクアップする。お楽しみに。

■2008年11月12日
本土撮影も終盤

本土での撮影も大詰めを迎える。どんどん泊まり込みの人数も少なくなる。泊まり込み最終日の今日は三人である。広島から良一役の岡崎優羽、東京から前原役の工藤杏とユカ役の古畑悠夏である。杏ちゃんや優羽くんは何度も来ているがゆかちゃんは今日が初めて。（中略）大阪は二度目というゆかちゃんを連れて移動。去年の舞台「銀の鈴」2007を観にきたそうだ。エイサーの迫力に驚いたそうだ。（中略）

ゆかちゃんと杏ちゃんで明日の読み合わせを行う。明日の出演者のほとんどが子役である。先日のカメラマンとの打ち合わせ時にも「時間がかかると思う」という結論に達したので、出来ることは今のうちにやっておこうというわけである。そして少々の演技レクチャー。時間も押してきたのでそれぞれ雑魚寝。朝はみんな早くに起き出す。荷物を車に積み込み、今日の我々が目指すところは、交野市（かたのし）の古い神社である。（中略）そんなこんなで撮影開始と相成った。

■2009年1月6日

到着

予定より少々遅れたが那覇空港に到着である。（中略）記念館に到着すると沖縄タイムスと琉球新報の記者さんも来ていた。荷物を置かせてもらって小桜の塔への参拝である。最初、ここに立ったのはちょうど十年前。雨の上がった早朝。旭が丘公園を一回りしてやっと見つけた小桜の塔であった。その時から何回来たか分からない。ほとんど一人である。しかし今日は三十八名もの人たちと一緒である。それも対馬丸の映画を作るという共通の目的をもった三十八名である。感慨ひとしおなのは言うまでもない。『今度来るときは、俳優と一緒に来るわな』と、ここで彼らにした約束を果たせたのである。じっくり見ていると涙が出てくるのが分かっていたので、早々に退散することにする。小桜の塔は目に焼き付いてしまっている。彼らとは縁もゆかりも何もないが、すべての海がつながっているように、父親の弟もそのつながった海に沈んでいったのである。方角はどこを向いていてもかまわない。海に花を手向けるということは、すなわち、すべて海に沈んだ方々の慰霊になるのである。（中略）

その後、全員は記念館を見学。こちらは取材を受ける。子役たちも取材ぜめである。（後略）

対馬丸描く映画「銀の鈴」

出演児童ら来県

記念館訪ね歴史追体験

対馬丸沈没とその後、生き延びた子どもたちを描く「『銀の鈴』―対馬丸より、今を生きる君たちへ―」（脚本・監督斎藤勝、製作・同製作委員会、劇団ARK）に出演する子どもたちと撮影スタッフ四十人が最終撮影のため二十六日来県し、那覇市若狭の対馬丸記念館を訪れた。

出演者は館内で、亡くなった人々の写真や船内の模型などを見て対馬丸の沈没までの状況をイメージした。亡くなった人々を慰霊する「小桜の塔」に手を合わせ、塔の墓碑銘の中から「平良」や「宮城」「玉城」など役柄と同じ名字を見つけると感慨深げな表情を見せた。

今回初めて沖縄を訪れた糸満出身の父を持つ大城雷次君（三）は「自分たちと同年齢の子どもたちが亡くなったことを真剣に考えさせられた。撮影が終わったら祖母から戦争体験を聞いてみたい」と話した。

斎藤監督は「沖縄での撮影は欠かせないことだと考えていた。子どもたちに現代の沖縄が癒やしの島ではないことを知ってもらい、沖縄戦の歴史に少しでも触れてほしい」と話した。

「銀の鈴」の一行は、三十日まで県内数カ所で撮影する。映画は二〇〇九年四月末に聖トマス大学の試写会で初披露され、五月に対馬丸記念館で上映会がある。

小桜の塔の墓碑銘に見入る出演者たち＝26日、那覇市若狭の対馬丸記念館

▲琉球新報　平成20年12月28日

齋藤監督による『銀の鈴』Blogはこれから編集、完成、試写とまだまだ続きます。
掲載したブログの詳細は
http://www.ginnosuzu.com/cgi-bin/mysketch/index.html をご覧ください。

製作支援のお願い

・映画「銀の鈴」は二〇〇〇年七月二十二・二十三日に大阪で初演された戯曲「銀の鈴」の映画化です。戯曲「銀の鈴」は二〇〇四年九月二十四・二十五日に再演され、二〇〇七年十月七日に三度目の公演を行いました。

・沖縄戦を象徴する対馬丸事件を広く知っていただくため「銀の鈴」製作委員会を立ち上げ映画化を決定いたしました。しかし、商業目的とは一線を画す映画の製作の為、資金調達も通常の方法では困難です。そのため広くみなさまからのご寄付、ご協賛をお願いさせて頂いております。ぜひとも、お力をお貸しください。

■協賛について

協賛者については個人・企業を問いません。

1口1万円

■特典

ホームページへご協力者の方々のお名前を掲載

（掲載に同意された場合のみ）

映画本編のエンドロールにお名前の掲載

1口1名様無料ご招待

■振込先

ゆうちょ銀行　総合口座（ぱるる）

口座番号　記号14140　番号8574489 1

口座名称　銀の鈴製作委員会（ギンノススセイサクイインカイ）

三井住友銀行　立売堀（いたちぼり）支店　普通口座

口座番号　1414193

口座名称　銀の鈴製作委員会　齋藤勝

＊申し訳ありませんが振込手数料はご負担下さい。

◆お問合わせ◆　「銀の鈴」製作委員会事務局　事務局長／塩間良典
〒五七一―〇〇六二　大阪府門真市宮野町十九―七
電話・FAX 072-883-7941　e-mail info@ginnosuzu.com